



部落問題文芸作品選集

第17卷

部落問題戲曲集

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第十七卷

昭和四十九年十二月十五日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五  
電話〇三 (七一六) 六一五一(代表)  
(七二三) 九二四四(夜間)  
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

# 目次

目次

盆踊長崎団扇絵

緑堂野史

1

訣れ

藤範晃誠

87

人類懺悔の秋

藤範晃誠

107

国民融和日

薬師寺章

135

児童融和劇

藤範晃誠

147

離れ行く心

青木貞吉

159

淨火

西光万吉

189

盆踊長崎団扇絵

緑堂野史





盆踊長崎團扇繪

人物

畫師瀧澤眠齋

全 母

全 云號ふさ子

畫師宇多川豐齋

全 國松

萩の藩士桂孝陰

僕 喜介

扇屋亭主

丁稚長松



綠堂野史(寄)

肴屋仙太

穢多娘おえづ

全 母

穢多多作

茶見世老爺

さかなや銀次女房

輕子三人

捕手五人

長崎人民大勢



## 初 幕

### 其一 長崎本町扇屋の場

〔長崎繁華なる町通り、團扇扇子問屋大店の橋へ、暖簾に扇屋と染抜き、亭主帳場に、丁稚店頭に座り、輕子三人荷造をなしぬる〕

亭主 それで荷造はみんな出来あがりしましたね。

輕子 いへい、これですつかり出来あがりしました。

輕子ろ 今日は盆の十三日ゆゑ、早仕舞に致したく、大骨を折ました。

亭主 それはお苦勞だつた。

輕子は 旦那い、この荷は土藏へ入れ升のでござりますか。

亭主 すぐに川岸へ御して貰うのだ。

輕子三人 かしこまりました。(三人の輕子よつしよいくの掛壁にて荷を二三度運ぶ)

亭主 番頭はじめ若い者らが、みんな債取に出て仕舞うたに、家ではまだ荷造をするといふ始末ぢや。今年のやうに忙しい目には、まだ出逢うたことがない。それといふもこの繪のお蔭、團扇も扇もこの娘の繪でなうては、賣れぬといふは不思議なことぢや。繪はどれも違つてゐるが、一人の娘を型に使つて、書くものには相違ない。それに廣いといふてもこの長崎、今以てその番工も、この離

型娘もわかれぬといふは、これも亦不思議なことぢや。地紙はみんな出島の荷蘭陀邸から持つてくるが、支那人が書くの、又荷蘭陀人が妾を寫すの、なんのといふても、どうもこの筆つきぢや受取れぬ。いや、受取れぬいへば長松、この書附を持つて往つて、近廻りのお拂を受取つて來い。

長松　へいへい、（籠を向き小き聲にて）こつちやさきから往きたくつて、堪へられぬい處だつた。

亭主　なに。

長松　えい、こつちのことでござい升。（書附を以て入る）

（番師宇多川豐齊、全國松花道より出で、好き處に留る）

豐齊　今年のやうに隙ぢや、この盆が越されない。おれも今年は四十九歳、いや、厄年といふものは、争はれぬものだわい。

國松　師匠、そりや厄年のせいぢやござりません。これといふも異昧の知れぬい繪が、流行るせいでござります。今日こそ扇屋の老爺をひつちめて、實を聽かねいぢやあかれない。

豐齊　扇屋の亭主もまさかにその書手を知つてゐながら、あいらに黙つてゐるといふ譯でもあるまう。

國 松かき手の知れぬ繪を賣るといふ法があるのですか。いよ／＼知れざうがす。百兩づゝも借りてやりませう。

豊 審 これさ、國松、そんな亂暴なことを云つちや困るが、まあしいくらか借らざうちの始末がつくめいて。

國 松 おやち家<sup>?</sup>に居れば好いが、これにて兩人舞臺へ来る。

豊 審 いや御主人、めづらしく家<sup>?</sup>に見えられたな。

亭 主 これは／＼先生方、いつも御壯健であめでたうござり升。今日は取込みましてこの狼藉座席もござりませぬが、どうぞこちらへお上がり下さりませ。

國 松 珍しい繪が流行るので、團扇も扇も羽根が生へて飛ぶほど賣れるといふが、至極結構なことだ。まあし扇屋さん、今日は是非ともその書手を聽かせて貰ひたくて参りました。(兩人好き處に住ぶ)

亭 主 その事でござります。先生がたより殿しくお尋が、ござり升ゆえ、この間中より、段々穿鑿いたしまするが、何分にも異人館より出ます地紙の事ゆえ、どうもその穿鑿が今以て往届きませぬ。人のいふには、西洋人か支那人が書くのだらうとも申しますが……。

國 松 いや扇屋さん、そんな事は私達に云つて貰ひたくねい。そりや世の中の盲目に向つて云ふことだ。

豊 齊 これさ國松靜に口を利かないか。いや御主人、誰れが繪を書うとも、それに構うたことはないが、こなさんも知つての通り、私達の派では掛物類などいうてはいくらもなく、まづ團扇、扇子、錦繪などを書くが本職。その家業が陳に成つては、この盆も越されぬ始末。どうしても私達の書く繪が世に行はれねば是非もない。まかし實はこの流行繪の書手に逢つて、その書方の傳習を受け、仕事を分けて貰つたら、いくらか融通がつかふかと、それでこの間中より仲間の物がお尋申すわけでござり升。

亭 主 いやまう一々御尤にござり升。私方にても書人の知れぬ物よりも、今迄通り先生がたに願つて、賣たうはござり升が、この書き振りは餘程違つて居りまして、ひとりの美人を粉本にして、書くものと見えまして、どなたがお眞似なされても、眞似たのは賣遠く、つい商賣の悲しさには、華主さまの注文にて據處なく又異人館からばかり地紙を仕入るやうになります。

國 松 扇屋さんの前ですが、商人といふ物は随分薄情なものですな。私達がこれ程困るに、いくら錢が儲かると言つて、毛唐人からばかり物を仕入れ、日本人の

まかも同じ土地の長崎人に、口を干さすといふのは、仕様のねい錠棒だ。

豊 齋

これさ國松、氣を附けて口を利ぬか。いや御主人、その繪は西洋風の目新らしい書き振りなれど、熟く視ればどこか狩野の筆つきが見え升ので、どうかその雛型娘にても知れたらば、自然書き手も知るゝ道理。たとひそれは知れずとも、我らもその雛型につきて研究致さば、又別に面白い物が出来やうかとも思はれ升が、その娘もまだ知れませぬか。

亭 主

それも誰なるか今以て知れませぬ。察しまするに、大阪などの他國より連れて參つて、異人館に圍ひおき、外へは出さぬものと見えます。

國 松

どうも怪しからぬ事だ。世の中にや仕様のねい人間ばかり居るものだ。亦唐人に賣る畫師が、私達の仲間にあるんだ。師匠、どうもそんな奴ら相手にゑたつて仕様ねい手取り早く言ひませう。扇屋さん、今も師匠が言つた通り、肝腎の職が陳でこの益が越せないので、私達の仕事が出来たら勉強しやすから、少し前金に貸しておくんなさい。

亭 主

それはもう承知致しました。流行繪は一時の事。今に廢らば、又先生方のお國振り、かならず高尙な處に戻り升。(現箱の引出しより銀を出して數こ唯今多分に

は、置上げられませぬが、豊齋先生に廿金、國松様に十金、後日の仕事の手配として差上げおきますれば、御受取り下さりませ。

豊 齋 面目ないがそれなれば、繪の前金として借用致します。唯、今判を持合せねば、受取は後刻までに。

亭 主 御序の節で宜うござり升。

國 松 商人といふ物は、どこまで助才がないか知れぬい。

(着屋仙太、虚荷を擔ぎ下手より出てくる)

仙 太 こんちは。旦那流行繪の團扇か、扇の新しいのは、まだ出ませぬか。これは新地の先生、國松さんも御揃で、大事の日に、お天氣で結構でござり升。

亭 主 この團扇と扇は、つい三四日ばかり前に出たばかりでござり升。

仙 太 (團扇を見て) どうも好いぬい。すばらしい出来だ。(扇を開き見て) これも好い、あかし團扇の方がよく出来た。どうも凄いな。

國 松 仙太さん、御前繪が好きか。

仙 太 どの繪も好きといふぢやないが、この頃流行る娘の肖像けいざうに限つちや、大好きでござり升。わつちやこの繪ゆゑにや、大好きな酒も斷たつてゐました。あははは。

豊 齊さう云へば、御前、この節酔つたのを見たことがないの。

仙 太 この女ゆゑにや、いやこの流行の繪ゆゑにや、あれほど好きな酒も断つたといふ、大笑でござり升。

國 松 御前その女を知つてゐるのか。

仙 太 大しりの清兵衛……といひていが、眞個ほんこの女は知りません、たいこの肖像しやうざうの美しいのに惚れて、こゝの見世の衆は皆さんが知つてゐますが、わつちやその新繪の出るたびに、團扇でも扇でも一本づゝは乾度買ひます。(又團扇を見てこの團扇はよつばど善く出来た。先生がたの前ですが、番師がだんく上手に成つて來ましたね。はは、眞個ほんこの物そつくりだ。

亭 主 肴屋さん、その女を知つてゐるなら、何でも禮をする程に、教へては下さるまいか。

仙 太 滅法な事を云ひなさるな、この繪の女が何處のもんだか、なんでわつちが知つてゐませう。先生方せんせいの前ですが、繪虛事えきごとで好い加減の事をかくんでせう。それよりや、この書をかいた番師に聞く方が早わかりだ。

國 松 その番師が知れるくらゐなら、御前にや聽やまねい。その番師がわからないから聽んだ。

仙 太へい、御前さん方もその書師を知らないんですわ。う、う、成る程こりやまうでせう。その書師は知れますめい。あの女を書くんだもの。どうして知れる筈がない。

豊 齊その口振りぢや、どうやらお前が知つてゐなさるやうだが、教へて下さる譯にや參るまいか。

仙 太 どうして私たちがそれを、知つてゐませう。こんな處に長居は無益だ。團扇と扇はいくらですね。

亭 主 團扇が二百、扇が三百でござり升。

仙 太 そいつあ高い……やうな安いもんだ。(盤臺の中の財布より錢を出だし亭主の前に置く) それぢや兩方お貰ひ申します。二百、三百と。

亭 主 ありがたうござり升。

仙 太 債はみんな取れるし、あれの姿繪は買ったし、こん夜は餘程面白い夢が見られるわい。(道具置る)







緑堂野史（寄）

初 幕

其二 馬込村穢多小屋の場

（穢多小屋の跡にて、母佛壇に燈をあげ、娘おまづ鏡にむいて髪を撫であげ、穢多の多作煙草を呑んでゐる）

多 作

やれ／＼早いもんだ。こつちの五平どのが亡くなられてから、もう三年になるどや。それでもお嬢、こなたは好い娘を持ちなすつて仕合せな事ぢや。早く聲を取つたら善かんべい。どちが心配するんだが、おまづ坊が聴んどの。これおまづ坊、いつまでも一人ぢやゐられぬ。みんな若い衆達がおめいの聲に成りたがつて、うづ／＼してゐるんだ。早くお嬢に安心させぬ。ちや善かんぬ。

おまづ

いつも／＼嫌な多作爺やだ。早くお歸んなさいよ。今日は盆の十三日でございます。